

ロシユフオール編

——シュバリ工島。

銃士隊の活躍で悪魔騒動は一件落着した。

しかし建物の損壊が激しいことから学園は閉鎖。

数年後、修復されたシュバリ工学園は、

エコール・プリメールと呼ばれる小学校から

リセと呼ばれる高校までの一貫教育をおこなう学園として再開された。

事件解決から70年後。

——シュバリ工学園の正門。

ダルタニアン

(いつ見ても大きな学園……迷子になりそう。

ここでの人は働いてるんだな……

……それにしても小学生の担任なんて想像するだけで……ふふっ)

清掃係の職員

「あ、ダルタニアンさんじゃないですか。」

ダルタニアン

「こんにちは。

いつも主人がお世話になってます。」

清掃係の職員

「い、いえいえいえいえいえ。

お世話になってるのはこちらの方なんですよ。

この間もひどくきつい叱り……

……ではなくて的確な注意を受けたところですよ!」

ダルタニアン

「……………」

清掃係の職員

「ところで今日はどうしたんですか?

授業の見学ですか?」

ダルタニアン

「いえ。

お弁当を届けにきたんです。

私、今朝ちょっと寝坊しちゃって……!」

清掃係の職員

「ね、寝坊……!」

そんな大きなミスをしたらロシユフオール先生から
どんな仕打ちを受けるんですか!?

罵倒ですか!?! 滅多打ちですか!?!」



ダルタニアン

「ふふっ、ませか。

『まだ寝てていい』って頭を撫でてくれましたよ。」

清掃係の職員

「……………」

……………衝撃的……………!

そ、そそそそそうですか……」

ダルタニアン

「もうすぐお昼休みですよね？」

職員室に届けてきます。」

清掃係の職員

「それなら中庭に行ってみたらどうですか？」

ちょうど体育の授業が終わる頃です。

その辺のベンチでランチするのもいいと思いますよ。」

ダルタニアン

「あ、そうですね。

じゃあ、行ってみます。

ありがとうございます。」

清掃係の職員

「行ってらっしゃーい。」

清掃係の職員

(これで昼休みの僕は安全です……………!)

——中庭。

——ガヤガヤ。

ダルタニアン

(子供の声が聞こえる。

……………あ、ドッジボールかな。ちょっと覗いちゃおう)

——ボン！ バシッ！

小太りの男子 「うわぁっ！」

ロシユフォル

「貴様、逃げるだけでは勝てないぞ。

もっと前に出てボールを積極的に取れ。」

小太りの男子

「だ、だってロシユフォルせんせいのボール、

はやくて取れないよぉ！」

ロシユフォル

「無理だと思っから無理なのだ。

貴様は戦っ前から負けている。」

ダルタニアン

(ああ……………)

ロシユフオール 「授業といえども勝負は勝負だ。
全力で戦え。」

小太りの男子 「は、はい！」

——ビュッ！

——バン！

小太りの男子 「うわあっ！」

ロシユフオール 「背中を向けるな。」

小太りの男子 「うああああん！」

ダルタニアン (ああ、泣かせちゃった……)

ロシユフオール 「男が人前で泣くな。

だが、前に出てきたことは褒めてやる。」

小太りの男子 「え……」

ロシユフオール 「よくやった。」

小太りの男子 「せんせい……」

ロシユフオール 「皆、いいか。たかがボールに恐れるな。

勝利が欲しければ相手の先を読み、
積極的に攻撃をしかける。ゲームを操るのは貴様たち自身だ。」

ダルタニアン (8歳相手にまた厳しいこと言って……)

男子全員 「はいっ！ ばんばりますっ！」

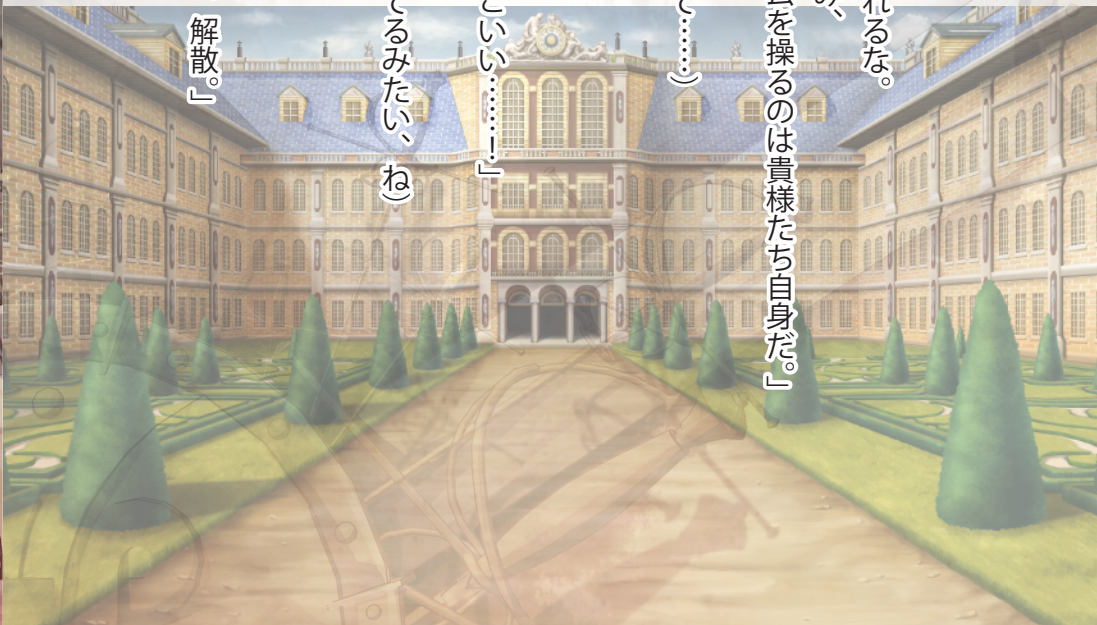
女子全員 「ロシユフオールせんせい、かっこいい……！」

ダルタニアン (……ふふっ、意外と上手くやっってるみたい、ね)

——ガラーン、ゴローン。

ロシユフオール 「ではこれで午前の授業を終わる。解散。」

一同 「ありがとうございましたー！」



——バタバタ……

ロシユフオール 「ふう……」

……なんだ、ダルタニアン。来ていたのか。」

ダルタニアン 「うん。」

お弁当を届けにきたの。」

ロシユフオール 「そうか。ならば一緒にぶっだ？」

ダルタニアン 「うん！」

多めに作ってきてきてちょうど良かったな。」

——ガタン。ガサゴソ……

ダルタニアン 「はい、どうぞ。」

ロシユフオール 「ああ。」

ダルタニアン 「あなた、どう？」

今日のランチは何点 かな？」

ロシユフオール 「……10点だ。」

ダルタニアン 「10点!？」

ロシユフオール 「安心しろ。10点満点だ。」

ダルタニアン 「もう〜！」

ロシユフオール 「満点でないと納得しないんだろう？」

ダルタニアン 「ふふっ、そうなの。」

だって、一生懸命作ったんだから。」

ロシユフオール 「フッ……そうか。」

ダルタニアン 「……ねえ。」

ロシユフオール 「何だ？」

ダルタニアン 「さっき子供たちとドッジボールしてたでしょう？」

私も今度したいな。」

ロシュフォール 「……………」

ダルタニアン 「見てたら子供の頃を思い出しちゃった。よくお父さんとボール遊びをしたこと……ふふっ。」

ロシュフォール 「駄目だ。」

ダルタニアン 「どっして?」

ロシュフォール 「……生まれてくる子に障る。」

ダルタニアン 「やだ。」

「この子が生まれたり、の話なのに。」

ロシュフォール 「ああ。そうか。」

「ならば先に言え。」

ダルタニアン 「ふふっ。」

ロシュフォール 「大きくなってきたな。」

「あと、ひと月で生まれるのか……」

ダルタニアン 「あ、動いた。」

「……ねえ、触ってみる?」

ロシュフォール 「……いや、さ。」

「……でそのようなことは……」

ダルタニアン 「もう、照れ屋なんだから。」

ロシュフォール 「……貴様……………」

ダルタニアン 「ねえ、この子に話しかけて?」

『パパは待ち遠しいでちゅよー。』

早く生まれてきてくだちゃーい『って。』

ロシュフォール 「……………」

「パ……」

ダルタニアン 「冗談よ。ふふっ。」

ロシュフォール 「……危つく言っところだった……」

「だが……………」

ロシュフォール 「やはり触らせろ。」

ダルタニアン 「うん。どうぞ。」

ロシュフォール 「……………」

ダルタニアン 「ね？ 動いてるでしょっ？」

ロシュフォール 「……………」

ダルタニアン 「そうしてるは何よりも幸せそうなんだから。」

生まれてきててもこの子にはかり夢中にならないでね。」

ロシュフォール 「フッ……」

安心しろ。

貴様にも夢中だ。」

—風の音。

樹の精霊の女 「見てください。」

あの男の人、貴方にそっくり……………」

樹の精霊の男 「……………フン、くだらん。」

樹の精霊の女 「そんなこと言っ……………」

毎日あの二人を羨ましそうに眺めてるくせに。」

樹の精霊の男 「……………」

……………おい、そのように動くと指輪を落とすぞ。」

樹の精霊の女 「あ、大変。」

大事なサファイアの指輪なのに。

でも……………いつもこうやって

ちゃんと身につけてますからね。先生。」

樹の精霊の男 「……………フン。
失くすなよ。」

ロシュフォール編終わり。